わがまち「竜王」を輝かせる人々

～2011年　竜王町「交竜の郷あえんぼ賞」受賞者の皆さん～

10月29日、「まちづくり煌きフォーラム」で「交竜の郷あえんぼ賞」の表彰者の紹介が行われ、皆さんに推薦いただいた中から、選考の結果、10者の個人・グループが受賞されました。

竜王町は、私たちの周りで、広く地域を支える奉仕活動や社会に貢献する活動、人知れず地道で心温まる活動、他の模範となるような善行活動などを行っているこれらの人・グループに深く感謝し、町民皆さんの心豊かな住みよいまちづくりへの参加が広がることを目指します。

※受賞者のご紹介は順不同です。

大塚 進一郎 さん（川守）

おおつか・しんいちろう

竜王野球スポーツ少年団結成以来、30年間にわたり、子どもたちの応援と見守り。送迎や差し入れなど練習の支援。

今も昔も少年野球のメンバーには、“大塚のおっちゃん”と親しみを込めて呼ばれている大塚さん。少年野球との付き合いは、竜王野球少年団が結成された約30年前。ワゴン車を所有していたことから試合などへの送迎を手伝われたのがきっかけとなり、以来、公式戦・練習試合を問わず、必ずと言っていいほど応援に駆け付け差し入れをし、声援を送りながら見守ってこられました。大塚さんは、「野球がもともと好きやったので」と事もなげに話されますが、「平成9年と11年には滋賀県代表になって…」、「何年やったら○○君とかうまかったなぁ」と、すらすらと話される様子に少年野球との深く長いつながりがうかがえます。団員の保護者からは、「どこの会場で前回の大会ではどうだったとか、よく覚えておられる。まちの応援団の代表という感じです」と信頼も厚い様子です。「そういや昔、スポ少にいた子が親になって二代目の子もいるなあ」と話される“大塚のおっちゃん”。今も昔も変わらない少年野球愛は、これからもあせることがありません。

寺嶋 篤夫さん（新村）

てらしま・とくお

幼稚園児のサツマイモ収獲体験をする際の畑とサツマイモを25年にわたり毎年提供。園の畑でも苗の植え方や世話の仕方を指導。

「近くの農地で草がぼうぼうに茂っていた場所があって、役場の職員から『子どもたちにイモでも植えてやってくれへんか』と声を掛けられ、イモやったら山之上の特産やし、それなら…と、始めたんです」と振り返られる寺嶋さん。以来25年間、毎年欠かさず子どもたちのために収穫体験用のサツマイモ畑を作ってこられました。「25年間にもなりますか。それだけ続けてこられたのは、体が元気だからで本当にありがたいこと。本当に何にも大したことではないです」と、終始謙遜し続けられました。「子どもたちと焼き芋をしてみたり、苗の植え方や育て方を話したりしたこともありました。長年していると世代が代わって、園児の親が『小さいころに来させてもらったわ』と言われることもありました」と顔をほころばされました。「体が元気な限りは続けていきたいです」と、にこやかに話される様子に、甘いほくほくのサツマイモと子どもたちの笑顔が思い浮かびます。

◀園児にクッキング指導する「ぐらちゃん」のメンバーたち

ぐらちゃん

メンバー13人が、高齢者デイサービスや一人暮らしの高齢者へ手作り弁当を提供。また、幼児へのクッキング指導や保護者向けのおやつ作り・弁当作りの教室も実施。

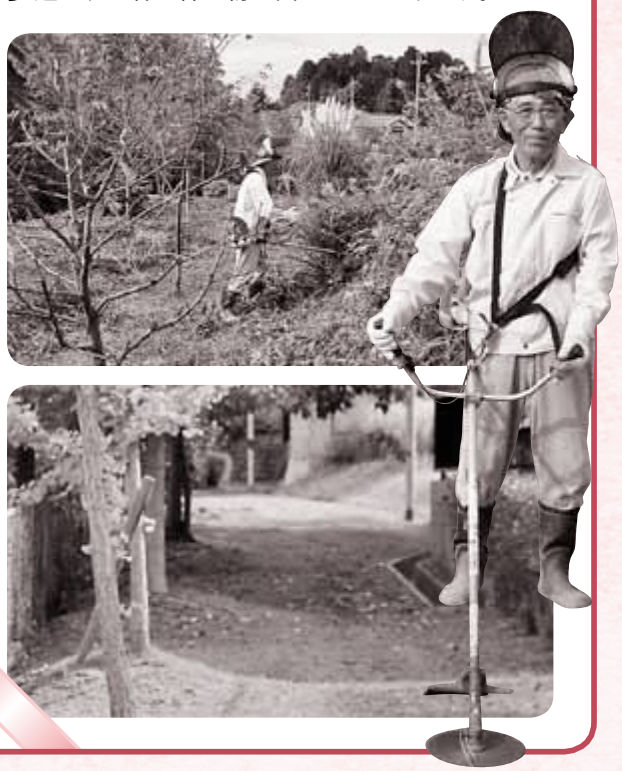
「ぐらちゃん」とは、グランドマザー（おばあちゃん）という意味。50歳代から70歳代までの女性13人のメンバーで、高齢者デイサービスや一人暮らしの高齢者へ手作り弁当を提供したり幼稚園の5歳児にクッキングを教えたり、料理を通して幅広く活動しておられます。「楽しいので毎回喜んで行っています」と代表を務められる福山泰子（ふくやまやすこ）さん。幼稚園でのクッキング指導では、「調理の時間は30分くらいと限られている中、お米がとれたので、ご飯を炊いておせんべいをしようかとか、園でとれた野菜を使ってピザにしようかとか、毎回試行錯誤しています。ダイコンを使ったホットドッグなんていうのもありました」と、活動開始から9年たってもアイデアはまだまだ尽きることがありません。園児に料理や食べることの楽しさを伝えるだけでなく、近ごろは保護者向けにお弁当作りの講習会を開き、栄養のことや食品添加物の話もされています。子どもからクッキングの話を聞いた親からレシピの問い合わせもあるそう。「ぐらちゃん」のメニューは、おいしく楽しい思い出の一つになり、竜王っ子の心と体を支えていくに違いありません。

尾﨑 恒夫さん（美松台）

おざき・つねお

地区内の荒れた小川を手入れ。サクラ15本のほか、ユズ・ミカン・アジサイなど四季折々の花を植樹し、区民が楽しめる散歩道を整備。

美松台の団地内を通る小川沿いに、サクラ、ピラカンサス、ユズ、イチジク、アジサイなど30本以上の樹木を植えられたのは、小川沿いにお住まいの尾﨑さんです。「京都の哲学の道のようにきれいになればいいなあ」という思いで始められた当初は、犬のフンの入ったビニール袋が散らばり、背丈が隠れるくらいの草やツルが茂っていたといわれます。「定年になってから竜王に来て、家の窓から桜並木が見えたらなと思っていました。もともと地域のボランティアの人がきれいにしてくれていましたが、だんだん活動が下火になってしまっていたので、自分たちの身の回りは自分たちで整備しようと決心して始めました」。10年前に始められて現在に至るまで、ご夫妻でこつこつと草刈りやごみ拾いをされて、約100メートルの小川沿いの手入れを続けられています。「最近は足が痛くなって、草刈りなど十分にできないんですけども、近所の方がごみを捨てないでと呼び掛けるポスターを作ってくださったりして、ありがたいです」。四季折々の花や樹木が楽しめる散歩道は、地域の絆も紡ぎ出しているようです。



山面さわやかパトロール隊

山面地区で防犯パトロールを８人のメンバーで継続実施。草刈りなど美化活動や地域の３世代が交流できる地域行事も推進。

「地域のことはまず地域で何とかしないとと思って」と、頼もしい決意を持って結成された「山面さわやかパトロール隊」。過去、地区内に不審者が現れることが2回続いたことをきっかけに、山面地区の有志で立ち上がりました。現在のメンバーは男女合わせて8人。週に2回、年間を通じて防犯パトロールを続けておられます。「夜8時ごろに懐中電灯を持って集まります。80歳を超えるメンバーもいて、あれやこれやおしゃべりしながら1時間以上歩きます。老人車やハウスカーをつえ代わりに押しながら来る人もいるんですよ」と楽しそうに話される代表の長江（ながえ）とみ江（え）さん。玄関にはパトロール用のジャンパーやたすきが常に準備されています。「防犯パトロールだけでなく、通学路のごみ拾いや花植えもしています。近ごろは子どもからお年寄りまで3世代が交流できる地域行事の開催にも力を入れています。竜王の夏祭りにも3世代で踊りました」とのこと。山面地区の安全・安心のため、さらには誰にとっても温かで居心地のいい山面の地域づくりのために、パトロール隊の活動は、四方八方に広がっていきます。

菱田 善雄 さん（駕輿丁）

ひしだ・よしお

13年前から地区内と県道を毎週ごみ拾い。長年の活動によりポイ捨てごみが著しく減少。環境美化で地域に貢献。

「定年退職して、何か地域に恩返しできないかと考えて。最初は火の用心の夜回りをと思ったけど、もともと火事のない所なので、夜回りしてから火事が起こってもかなわんから、じゃあ、ごみ拾いでもしようかと」と決められたのは13年前。それ以来菱田さんは、地元駕輿丁の地区内と県道沿いのごみ拾いを毎週続けておられます。ごみの入った袋を窓から投げ捨てた車を止めて、「おっさん何してるか分かるか、ごみ拾ってるんや」と叱咤（しった）し、捨てたごみを拾わせたというエピソードもあるように正義感の強い菱田さんは、「目に入ったごみはどんなごみでも拾う」と徹底されています。「10年前と比べると地区内は減ったけど、県道沿いはたばこの吸い殻が多いなぁ。夏はペットボトルのごみも多い。続けられる限りは続けますよ」と話される菱田さん。こつこつと一人でごみを拾う姿に、今日も「みんなができひんことを、ようしてくれてるなぁ」、「おっちゃんご苦労さん」と、道行く大人・子どもから声が掛かります。

竹山 千代子 さん（西山）

たけやま・ちよこ

近隣の一人暮らしの高齢者宅への声掛けによる見守りや、敷地の草刈りや生垣の刈り込みなどの奉仕を継続して実施。

竹山さんは、近所に一人暮らしのお年寄りがおられたことがきっかけで、一人暮らしの高齢者への訪問や見守り、草刈りや生垣の刈り込みを始められました。「もともとおせっかい焼きやから、自分のことをほったらかしにしても他の人を構いたがる性分なんです」と自己分析される竹山さんは、夜に出歩くときも一人暮らしの家に電気がともっているか自然と確認してしまうそうです。「草刈りのついでに、一緒にいっぷくして話し込んだりしています」と、楽しみながらされている様子。地域では、小学生から大人までに“ちよちゃん”と呼ばれ親しまれておられます。「草刈り機は趣味のようなもの。県道の歩道で『女やってできるんやでー』と張り切ってると、通りすがりの自転車の学生が頭を下げて行ってくれたこともありました」。地域の皆さんに「働き者」と評されるとおり、高齢者宅の見守りのほかスクールガードもされるなど、活動範囲はとどまることがないようです。

山中 忠義さん（山中）

やまなか・ただよし

地域のゴミステーションの美化とごみ減量を目指して、ごみの正しい分別の知識の普及やごみに対する責任意識を育む活動に尽力。

町の実施する「ごみ減量チャレンジ優良地区報償事業」で3年連続1位を達成した山中地区。地域全体で取り組まれる姿勢とその工夫は、まさにナンバー1。ほかの自治会にもその取り組みが紹介されているところです。そして、この山中地区のごみ減量の取り組みの先駆者が山中さんです。もともと町のエコライフ推進協議会の委員もされていた山中さんは、かつて生ごみの汁で汚れ、分別不十分で回収されなかったごみ袋が残ったままであった山中地区のゴミステーションを何とかしようと決心されました。まずは家庭から出るごみを分別・分析されることから始められ、常にきれいなゴミステーションを維持するための仕組みを検討し、ごみの正しい分別方法や知識をポスターで呼び掛けたり、地区で勉強会を開いて伝えたりしてこられました。これにより、区民一人一人のごみに対する意識も徐々に変わり、ごみの出し方や処理方法について自治会みんなで声を掛け合えるようになりました。ナンバー1になってからも、山中さんはゴミステーションの見回りを続けられ、改善に余念がありません。

▼自治会でごみ減量について話し合い、各家庭に合わせたごみ処理方法を考えました

長江 茂さん（山面）

ながえ・しげる

「竜王清流会」による善光寺川の環境美化作戦に積極的に参加。個人としても1カ月半にわたり、河川の急斜面に自ら重機を持ち込み竹木を撤去。

「竜王清流会」が取り組む善光寺川の環境美化作戦に積極的に参加されている長江さん。安全面から清流会で手に負えない下流の急斜面に所有する重機やトラックを持ち込み、茂った竹や樹木を撤去されました。この活動は実に1カ月半にわたり、整備された斜面は2キロメートルにも及びます。「作業を始めて何日かたったら、最後まで行けるかなぁと心配になってきた」と心情を明かされつつも、「毎日張り合いがあって楽しかったなぁ」と振り返られます。どこの集落も団体も手掛けることのなかった善光寺川の美化に、清流会のメンバーとして、また、一個人として積極的に関わり続けておられます。「足洗川（あしあらい）の土手を42日間作業し続けたら、川の向こうの道を通っている車がすっかり見えるようになった」と茂さんが大仕事の達成をさらりと話されると、同じく清流会活動に尽力される妻のとみ江（え）さんが、「夏にはあちこちの花火も見えるようになりました。『あ、あっちも、こっちも』と言いながら土手で見ていました」と話されました。長江さんや清流会の地道な取り組みが、竜王町の景観をさらに美しいものに変えていきます。

ありがとうの声

10月29日に行われた「まちづくり煌(きらめ)きフォーラム」で、受賞者の皆さんとその活動を町民の皆さんへご紹介しました。フォーラムに参加された皆さんからいただいた感想を紹介します。

このような賞ができると竜王町でもがんばっている方、地域のためにいろいろなことをしてくださっている方のことが知れてとても良い。 **20歳代 女性**

町のために素晴らしい活動をされている人がいると知りました。大変なこともたくさんあると思いますが、これからもお体に気を付けてがんばってほしいと思います。 **20歳代 女性**

何十年にもわたって地域のために活動できる方は、本当に素晴らしい方だと思いました。町全体でそういう方に感謝を表すことができて良かった。日常でも感謝を忘れてはいけないとあらためて感じました。 **30歳代 男性**

素晴らしい取り組みをされている方を知ることができた。私も子どもの手が離れたら、人の役に立てることがしたいです。 **30歳代 女性**

小さいことでもいいので、できることから始めていけたらいいなと思いました。 **40歳代 女性**

たくさんの人に支えられて生きてきました。シニア世代になり、何か役に立つことをしたいと思いつつ、出番を探しています。身近なできることをしているが、長く続けられるようにがんばりたい。 **50歳代 女性**

この表彰制度を続けてください。皆さんの励みになると思います。 **60歳代以上 男性**

谷口 弘和 さん(西出)

たにぐち・ひろかず

幼稚園児たちに少しでもより良い環境をと、毎年8月に、園の遊具の修理や棚の作成など大工作業により奉仕。

ご自身も竜王幼稚園の卒園児である谷口さん。工務店を営まれるようになり、仕事で訪問した学び舎が「ボロボロなのにがくぜんとして」と、修繕を買って出られたのが始まりだそう。以来6年、園児たちに少しでもより良い環境をと、仲間に呼び掛け、毎年8月に大工道具を持ち込み園舎の手入れを行われています。「遊具の修理をしたり保育室の棚を作ったり、ウサギ小屋を修理したりしています。竜王町のためになれたらいいし、子どもたちにも『大工さんてカッコイイ』と思ってもらえたらうれしいですね」と谷口さん。夏休みが終わると、谷口さんたちの手でピカピカになった園舎や積み木が子どもたちを迎えます。「子どもたちに夢を与えたい」と話される谷口さんは、園が開くお世話になった人たちとの交流会「ありがとうの会」で、大工も子どもたちと一緒に楽しい時間を過ごされているとのこと。自らも夢を育まれた学び舎で、その修繕を通して園児の夢を育んでおられます。